

リヨンに渡った三人の先駆者 その1

日本の織を今日あらしめている紋織機ジャカードは明治六年一二月、フランスのリヨンから初めてわが国に輸入されている。竹内作兵衛の代理、佐倉常七、織工井上伊兵衛がリヨンでおよそ八カ月の伝習を経て持ち帰った。二人は公費による伝習生として、そして器械工吉田忠七は民費による伝習生として、ともに前年の十一月、京都府から派遣されている。



向って右から

佐倉常七、吉田忠七、井上伊兵衛

京都府編『京都府史―政治部勸業類六』大日本織物協会発行『大日本織物協会会報』二二〇―一二二号(明治二九年)横井時冬『日本工業史』(明治三〇年)など明治期の文献がその事実を伝えていいる。この史的事実は今日、わが国の産業史のなかで定かなものとなっている。

彼ら三人の肖像を収めた写真が一

葉、西陣織物館に所蔵されている。リヨン滞在中に撮影されたものである。京都の明治史を著わす刊行物に数多く使用されている。だがいずれも佐倉常七と吉田忠七の氏名表記が逆になっている。この事実は、彼ら三人が先駆者として評価され認知されたのは、意外に近年になってからだということを物語っている。

同写真は佐倉常七の『渡仏報告書』など数点とともに昭和五年、養女佐倉ヤエが西陣織物館に納めたものである。

そしてその誤謬を正したのも、奇しくも佐倉ヤエである。西陣の日事業協議会編『ジャカード渡来百年記念誌』(昭和四七年)によると、常七以下三人の肖像を刻む記念碑の除幕式に招かれた彼女が、感謝パーティの席上で指摘したという記述があり興味深い。その時に初めて三人の事蹟が名実ともに西陣史のなかに位置づけられたとみる。ひるがえって考えれば、それほどまでに彼らは無名だったということである。

ジャカードは西陣に一般化するまでおよそ三〇年を要したが、その苦闘の歲月が先駆者としての三人を隠蔽したためだろうと思う。(福本武久)